

地 方 茶

—村上茶について—

泉 敬 子

A Study on the Tea

—Produced in Murakami area—

Keiko Izumi

前報¹⁾において寒冷地の茶として宮城の茶について報告したが、今回は昔から北限の茶として知られている村上茶について、地理的背景、歴史的変遷を知り、食文化の一つとしてどのような役割を果たしているのかを知りたいと考え本研究を行なった。

研究方法は主として文献調査によるものである。

I 村上市の地理的背景

新潟県最北の岩船郡のほぼ中央に位置している。新潟市より約60キロメートル離れた地点である。西は日本海に面し、東は山岳地帯で山形県と接し、南、北はそれぞれ平坦な町村に接している。地形はT字状をなし、東西は約23キロメートル、南北は約21キロメートルで、約8割が山林となっている。東から西へ門前川、その他の川が流れ、市の中央で鮭で有名な三面川に合流して日本海に注いでいる。²⁾

三面川河口の左岸には赤松の防砂林に保護された田畑が広がっている。東方は連らなっている低山脈にはばまれ、耕地はせまく半農半漁の家が多い所である。

気候は日照時間が少く、雨量が多いという新潟特有の気候で、特に冬期間と7月に雨量が多く湿度も高くなっている。春秋は比較的晴天が多く雨量も少い。

気温は8月が高温で1月が最低であり全般的に雨量が多いが積雪は比較的少く、豪雪による被害は殆どない。過去15年間の気象資料によれば平均気温12.7℃、年間降水量2402ミリ、湿度81.5%、最高積雪量137センチメートルとなっており、降水日数は239日とかなり多い。³⁾

このように西に日本海、東は朝日岳に連らなる山々にはさまれた村上は山間地ではないが三面川流域にあって冷涼、高湿で銘茶産地の条件をみたしている。

II 村上茶の生産

日本においては中国から入って来て栽培されている栽培茶と、山間部で野生している山茶があることは既に報告されている。⁴⁾

村上茶は宇治から移植されたもので栽培茶であり「中条茶」「黒川茶」「村松茶」「下田茶」「福井茶」「麓茶」「松山茶」「大宝寺茶」「陣ヶ峯茶」「田家茶」「佐渡茶」等越後にみ

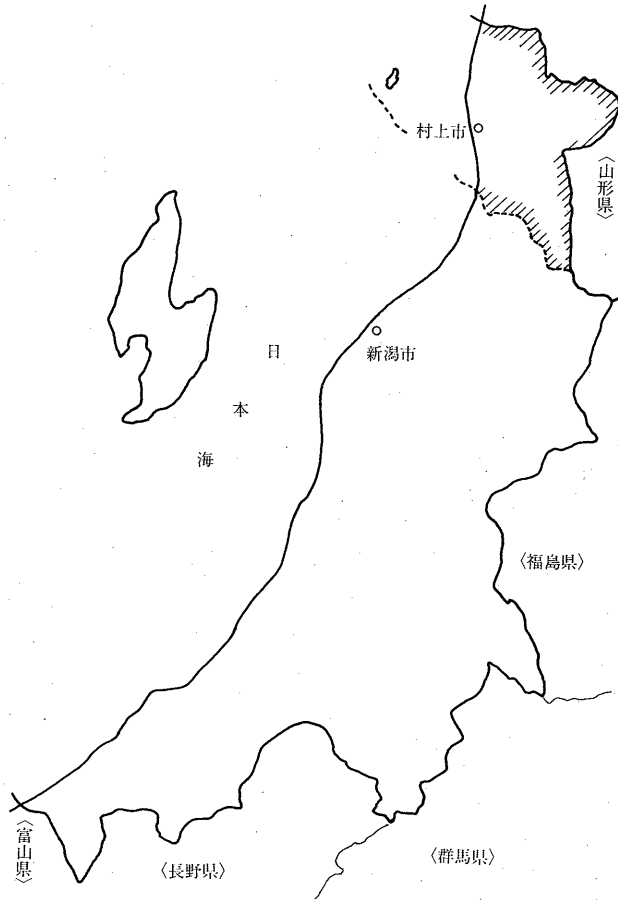


図1 新潟県

(『新潟県の地名』(平凡社)より)

られるほとんどの茶が村上茶の子孫であるといわれる。

農林水産省の統計資料によれば(昭和55年)全国総茶園面積は61,000ヘクタール、総生産量は102,300トンとなっている。

各地の生産量は静岡50,100トン(全国比49%)で最も多く、次いで三重7,030トン(6.9%)、鹿児島・奈良3,600トン(3.5%)

と続くが、新潟は62トン(0.06%)で35位である。うち村上は51.5トン(0.05%)で新潟県の生産量の8割以上を生産している。

因みに明治25~29年と昭和41~45年の生産量の地域別変遷を図3に示す。新潟県を含む北陸地域では明治では4.29%であったが、昭和ではその他に含まれる位に減少しているのが分る。

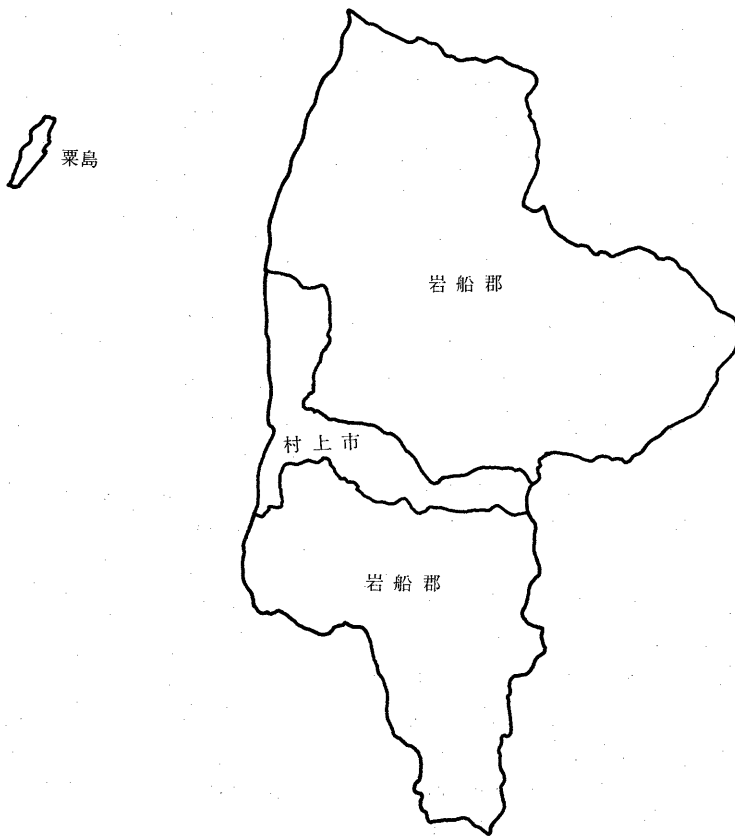


図2 村上市, 岩船郡

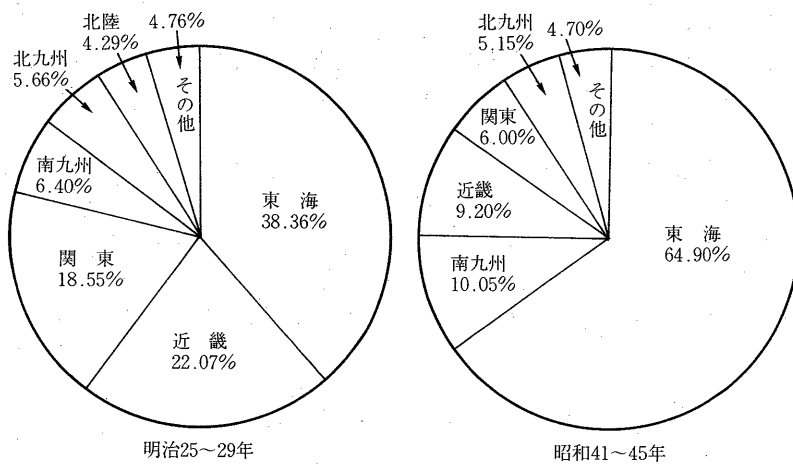


図3 生産量の地域別変遷 (農林統計表から作図)

Ⅲ 村上茶の変遷

1620年（元和6年）、村上町の大年寄役であった徳光屋覚左衛門が宇治及び伊勢より自費をもって茶の実を導入して農民に茶を播種させた。⁵⁾当時の藩主堀丹後守直寄や歴代の藩主の奨励もあり、次第に広まった。堀丹後守は茶の湯を好み自製の茶をつくることを積極的に奨励した。一説には直寄が宇治からとりよせた茶実を甚兵衛という人に江戸の邸内に植えさせ芽が出たのでこれを村上にひろめたとも云われているが⁶⁾村上郷土史では覚左衛門説をとっている。

1661～1673年（寛文年間）には覚左衛門の子が父の志を継ぎ茶業の振興をはかり黒蒸茶（番茶と煎茶の中間位のもの）を製造し、各地に移出して村上茶と称して漸次名声を博した。⁵⁾1669年（寛文9年）の田畑検地帳に、細工町の治右衛門、塩町の七右衛門、長井町では治兵衛と徳兵衛、上町の与次兵衛らが茶畑を持っていたという記載がある。

この時代は村上の最も石高の多かった時で、榊原15万石の式部大輔政倫の時代にあたる。

1674年領主榊原政倫が1町歩に永（永禄銭）5文5分の役銀を課しているところから、当時において既に茶園がかなりひろがっていたことが推測される。

1688～1704年、即ち元禄年間には佐藤儀左衛門がはじめて茶芽（新芽）を摘採して真摘製を案出し、べっ甲茶及び地製茶と称した。しかし、それから来る所得が少いため、茶畑を田に改める者が出て来た。

1704年本多吉十郎忠孝の時代には茶業の衰退により役銀は廃止された。

その時、町奉行飯田源蔵から村上町大年寄に次のような触れが出された。

覚

一、当代の茶役口銭の儀は、先御代（榊原政倫）のとき仰せつけられたけれども、茶の

買手がこの地方に来なかったのでこの町の者どもが、迷惑をいたしましたので、式部大輔（政倫）様の御役人にお願を申し上げたところ御慈悲をもってお許し願われたのは有難いことでこの度本多家へもお願い申上げましたわけです。それで右のような趣きを本多吉十郎忠孝の家老のところにも達しましたところ、こうした新しい税金には町中の者が難儀をいたすことであり、また、式部大輔政倫のときの町奉行の本目権蔵からの申し送りもあることであるから本多家でも御あわれみを以て今後、茶荷口銭をゆるされる旨仰せ出された。

一、しかし、上関や柳生戸のこの二ヶ所を通る茶荷口銭はこれまでの通り相違なく出さなければならぬ。

右のように本多家の家老から仰せ渡されたので町中の者にこの旨を申しきかせるようにされたい。

宝永元^甲年九月二十二日

飯田源蔵（判印）

村上町大年寄	利兵衛殿
〃	安左エ門殿
〃	利左エ門殿
近江屋	三郎左エ門殿

このような達しが本多家から出された。即ち他領の米沢藩に出す茶には茶荷口銭をかけたが、藩内では茶荷口銭を免除し、茶業を保護した。⁵⁾

1842年、藩主内藤信親は茶業の衰頹をうれい、国産係において茶樹の栽培と製茶の方法を研究させ、滝波重兵衛を製茶売弘め方に命じた。滝波重兵衛は奥羽諸国へ広く茶を出荷し販路を開拓して茶業の復興につとめた。

その結果、この頃から新たに製茶を始める者も出て茶の生産も増加した。

1851年には滝波重兵衛は旅出茶取締（他領に移出される茶の価格その他を取締まる役）に任ぜられた。この頃より重兵衛は宇治から

職人を招いて煎茶、玉露を生産するようになった。

1868年（明治元年）即ち明治の初期には栽培地は次第に拡大され、茶畑面積は郡全体で650ヘクタール、村上町だけでも400ヘクタールを占めていた。当時の茶専門業者は茶畑の買入れ又は播種によって自己の茶園をひろげて自園自製の経営の道をつくりあげていった。

その結果、各自の所有茶園は拡大し、摘採においても作業が間に合わない程になり、余剰の生葉を他の業者に販売しなければならない者も出現した。又、当時は製茶業者以外にも広大な茶園を所有している地主があり、製茶業者はこれらの地主から畑買い（生葉購入）して自己の茶園を更新するために台刈を行う方法もとられていた。

前記の滝波重兵衛は1869年に販路を拡張するため、同業者の佐藤市兵衛と共同で横浜の茶商高木栄助と結び、村上茶を直接横浜に販売するようになった。

1879年、新潟県村松より茶の再製法を学び、三井物産に依頼して横浜港より再製茶を輸出して好評を博したと云われる。

又、この時期には一時的ではあったが紅茶の製造も行われた。

その後、日本郵船の船を新潟県瀬波港に廻航させ、直接瀬波港から輸出していたこともあるといわれている。当時の輸出高は内外合わせて年間6000kgを越えていた。

1890年には磚茶の製造を始めた。磚茶とは番茶、茶の茎、紅茶屑などの粗悪な茶を蒸してから強圧を加え、板状に圧搾して乾燥したものである。この磚茶は横浜よりウラジオストックへ輸出された。⁶⁾

1868年よりこの頃までが村上の茶の全盛期である。

1900年以降は養蚕が普及し、作期の競合や経済性の点で茶業は再び不振におちいった。

1908年～1910年にかけて新発田、中浦へ茶業伝習所を設置し、製茶技術の指導を行なっ

た。1911～1912年には村上茶が宇治に送られそのふくよかな甘味のある特色が生かされ、宇治茶と混合したものを“宇治茶”として販売されるようになった。宇治茶は良質の茶として知られており、村上茶もこれに匹敵するだけの品質であることが推察できる。

1919年にはソビエトに茶種を送りコーカサス地方に茶業をおこす役目を果たした。

第一次世界大戦（1915～1918）後の世界的恐慌により、我が国も不景気になり、従って茶業も輸出不振となった。更に製茶機械の出現によって手繰法から機械製茶への変化に対応できないことや国鉄羽越線の開通により産業構造も変化し茶業を衰微させる原因となった。中小茶業者は大半の茶畑を大茶業者に譲り、自らは間作人となった。間作人とは茶業者の茶園の茶樹の間の空地を小作する人である。前記鉄道の開通は村上の社会構造を少からず変化させ、茶園においても地主の思惑によって桑園、果樹園、桐畑、水田、普通畑等に転換された。一方、市街地の発展も茶畑が主に住宅地に隣接していることから、宅地や公共施設に使用され、茶畑面積は減少する一方となった。第二次世界大戦後の食糧不足による他作物への転換、農地改革による保有制限更には1943年三面川電源開発工事の完成に伴う工場誘致のための敷地等により大きな面積の茶畑が失われている。

1974年には新潟県における茶畑面積は77ヘクタールにまで減少した。このうち村上市の茶畑面積は40ヘクタールで明治初期の1/10に過ぎないものとなった。

今後、山添いに丘陵地帯の開発が行なわれなければ将来村上茶の存在が危ぶまれるといわれている。

Ⅳ 村上茶の特色

従来の茶の摘採には手摘み、特殊鎌を用いる方法、へら摘み等の方法が知られているが村上地方では春茶は手摘みとし夏茶はへら摘

みをするという。⁴⁾

現在は機械を用いて大量に摘採する方法が一般に行われているが、良質の茶は現在でも上記のような動力を用いない摘採法が行われている。

村上茶の風味の特色は甘味があり、ふくよかなまろやかな味わいである。又、出が長く大きくこともあげられる。宇治の茶種より導入され、寒冷地ではあるが高湿の土地に栽培され独特の風味をかもし出している。

もともと茶樹は寒冷地には生産が難しいとされているが現在では栽培に工夫が加えられ秋田、岩手、宮城等の寒冷地でも少量ながら生産されている。茶は平均気温11℃が栽培できる限度といわれるが経済的北限は現在宮城辺りである。従来は茨城、栃木、群馬、新潟を結ぶ線の以南といわれていたところから村上茶が北限の茶として知られていたものである。日本で茶の栽培が制限を受けるのは主として冬の最低気温であるが、葉は零下10～13℃に降下すると褐変を始め、それ以下になると枝先も枯れる。しかし株の上部の葉や枝先が枯れても、春の整枝によって切り落されるので、かなりの低温でも栽培できる。村上茶の場合は秋整枝せずに徒長枝を出したままとして防寒をし、春整枝する方法がとられる。

村上市の平均気温は12.7度であり、冬の厳寒期でも零下以下に下るのは数回しかなく、発芽期の温度は比較的高いので、発芽後の晩霜の害をうけることは非常に少い。

茶は根が深いので乾燥には強いが、乾燥が過度になると茶質が不良となる。又特に発芽期に空気が湿潤状態であることが必要である。

村上では前述のように降雨量は年間2,402ミリであり、春から秋にかけて曇天が多く、又発芽期の前後には霧のかかる日が多く空気は湿潤であり、良質の茶を産する条件を有している。一方、茶樹の栽培には全面的に日射を受けることが望ましいが、この地域の茶園は主として平地であり、山添地域においても

南面傾斜地である為、充分日射をうけることができる。

太平洋側の茶の産地と比較すると村上市は冬季に降雪があるため、雪害を受けるおそれがあることが大きく異なっている。その対策として茶の植栽間隔を広くとり、降雪前に土を樹の根元に寄せ上げて雪害を防いでいる。又、樹頭に冠る雪は寒風を防ぎ、枝葉の枯死を防ぐと共に、海から来る季節風による塩害をも防いでいる。このような自然的条件に対処するためには茶樹は小仕立になっているのが村上茶の特徴である。⁸⁾

V 考察

以上村上茶について地理的背景、歴史的変遷について述べた。これらから考察すると、次の3点が考えられる。

1) 茶の栽培は低温、雪害等寒冷地においては様々のリスクがあるが、村上における茶業の成功は、栽培の方法や加工の為の技術的改良を重ね、寒冷地においても生育できるよう工夫して来た努力の結果であり、先人の苦勞を高く評価すべきであろう。

2) このように茶を寒冷地まで移し栽培し又藩が奨励したのは茶業に対する経済的評価が如何に高かったかを示すものであり、藩の財政上、大きな役割を果たすことが期待されたからである。即ち18世紀初期までは民間ベースの茶業の発展に対して課税を行うことによって、又19世紀中頃からは藩の国産事業として茶業の振興をはかることによって藩財政の一助にしようとしていた。このようにして、多少の変遷はあったにせよ、明治初期までは、十分この役割を果たして来た。今まで調査して来た宮城県等においても同様なことが考えられる。

3) 現在においては地方経済の重点をおく内容が変って来て、地方財政も全国的視野の中で捉えられるようになって来たので、特に経済的に見合うところでない茶業が成立しない

状態になっている。

更には近年における茶業向の労働力の不足が生産に大きな問題をなげかけている。

茶はもともと大工場で大量生産するような性質のものではなくて、中小の工場で地道に生産されているからである。

摘採の方法、蒸熱後の揉捻作業等は現在では特別の場合を除き機械化され合理化されているが、それにも拘らず労働力の不足は茶業の運営にとり極めて遺憾なことである。

村上茶の場合、以上の一般的傾向に加え、寒冷地における茶樹の保護、摘採の方法等にも十分に対処して、この由緒ある茶の生産を今後も是非続けて貰いたいと願うものである

本研究を行なうにあたり、資料収集に御協力を頂いた市村 肝氏、佐藤ひろみさん、三鍋友加子さんに深謝する。

参考文献

- 1) 泉敬子, 石崎弘子: 生活科学研究第8集 (1986)
- 2) 平凡社資料センター: 新潟県の地名, 平凡社 (1986)
- 3) 世界大百科辞典: 平凡社 (1967)
- 4) 大石貞男: 日本茶業発達史, 農山漁村文化協会 (1983)
- 5) 横山貞裕: 村上郷土史物語, 村上商工会議所 (1972)
- 6) 中蒲原郡誌
- 7) 中村辛一, 五百川清編: 越佐歴史散歩, 下越編, 野島出版 (1973)
- 8) 百武正雄: 雪国の茶
- 9) 井上鋭夫: 新潟県の歴史, 山川出版社 (1970)
- 10) 伊藤充, 山口武夫: 村松郷土史, 村松町史編纂委員会 (1976)
- 11) 林屋辰三郎, 藤岡謙二郎編: 宇治市史宇治市役所 (1978)